

---

---

# 哲学的解釈学からテキスト解釈学へ

歴史テキストを軸にして

佐藤 彰一

## はじめに

われわれが探究しているテキスト解釈学の精緻化と、テキストの布置構造の理論的解明とを結びつけるという課題は、単に学問的な問題であるだけでなく、教育という側面をもった一筋縄ではいかない、困難な課題です。哲学、文学、歴史学という、人文科学の核心に位置する諸分野全てに関わり、それゆえ人文科学全般にわたる広い知見が動員されてようやく、解決のための考察に取りかかり得るような難問です。

これまで推進担当者、研究員の皆さんと、3年間にわたり「テキスト布置の解釈学的研究と教育」というテーマで研究ならびに教育に努めて来ましたが、極めて理論的指向の強いプロジェクトでありながら、私個人は理論面の探究に手をつかねて来たというやや反省めいた思いもあり、計画の残りの期間が2年をきったこの段階で、1年ほどは解釈学の理論面について勉強しようと考えた次第です。果たしてオープンレクチャーの趣旨に相応しい、平易なお話ができるか心許ないところもありますが、いま私がプロジェクトのリーダーとして、こんなことを考えているところを理解して戴き、参考にして貰えればと思い取り上げた次第です。

言うまでもないことですが、自然科学と人文科学の大きな違いは、単純化するならば自然科学の場合は一般法則と因果関係を発見することをその課題としています。これに対して人文科学は現象の個別性と「意味の理解」を学問的営為の核心に置いています。

テキストの解釈学とは、簡単に言ってしまうえば書かれたテキスト、語られたテキストの「意味」をどのようにすれば「理解」し得るか、これを解明する学問です。そもそも解釈学、英語で表現すれば「ヘルメノイティクス」ということになりますが、これはただ単に書かれた文字、語られた言葉をインタープリートする、解釈するという行為を指すよりも、ハイデガーに代表されるように、人間の現存在の意味を解釈するという高

度に哲学的、形而上学的な負荷をになった概念なわけです。私どもの研究教育綱領への哲学者ガダマーの名前の記載も、「解釈学」という言葉が持っているこのような近代学問史における意義を踏まえての措置でありました。

しかし、他方ではわれわれの目的は、繰り返しになりますが、哲学的解釈学の推進ではありません。それは文字・言語テキストの意味理解の精緻化と体系化であり、哲学的ヘルメノイティクスは、そのための理論的手段を提供してくれる道具立て、発想、着想源というのがその位置づけになります。

とは言うものの、人間の存在論的諸契機と切り離し難い形での解釈学の営みは、古代ギリシアの哲学者、わけてもアリストテレスの考察、さらには旧約聖書や新約聖書に関する古代教父たちから、中世の神学者たち、そしてマルティン・ルターにいたる解釈実践があります。その思想的・理論的変遷を辿る作業は、作品の解釈学の深化を目指す上で大事な作業ですが、目下のところ私にはその準備がありませんし、時間も限られています。そこで、解釈学の分野で業績を挙げた啓蒙時代・ロマン主義の時代から、19世紀までのドイツで展開された解釈学的考察に的を絞って、言わば背景説明的な紹介を行い、続いてガダマーの解釈学をテキスト解釈学、なかでも歴史テキストの解釈学に読み替える試みをしたいと思います。

以上が長くなりましたが、「まえおき」です。

## ドイツ・ロマン主義時代の解釈学

フリードリヒ・シュレーゲルは1772年に、ドイツのハノーファーに生まれ、ゲッティンゲン大学で法律を学びましたが、やがて古典文学の研究に転身しました。兄の 아우グスト＝ヴィルヘルムと並んで、ドイツ・ロマン主義運動の代表的論客の一人でした。シュレーゲルはそのロマン主義の思想を、自我の反省を無限に繰り返しながら、「根源的自我」、「無限なるもの」あるいは「神」に接近して行く精神運動として捉え、兄の 아우グスト＝ヴィルヘルムとともに『アテネウム』を創刊し、思想運動の拠りどころとしました。彼はカントの『純粹理性批判』で展開されている、人間の認識能力を感覚に与えられたもののみ限定する、超越論的な被制約性の主張にも大きな衝撃を受けます。神やイデアのような直接の感覚的統覚の対象になり得ない対象は、人間の理性の認識の埒外にあるとするわけです。こうしたカントの影響もあって、彼は「理解の不可能性」というテーゼを立てます。『アテネウム』に発表した「Über die Unverständlichkeit (理解することの不可能性)」の中で、著者とその意図を理解することと、その果実である作品を理解することを区別し、著者とその意図を理解することは可能であるが、作品を理解することは全く不可能であると述べています。作品の意味はその個別性と、それを解釈する多様性により、それ自体曖昧で、その混沌たる論理に分け入るのは、その論

理を一義的なものに縮減することも、ともに困難であると主張するのです。ドゥニ・トゥアールというフランスの哲学者は、これを次のように纏めています。「シュレーゲルはあらゆる解釈学的企てを一気に相対化してしまう曖昧さというものが、必然的である」と考える。存在の矛盾し、混乱した性格を考慮するならば、理解は不可能である」と。今日の時点に立つて、シュレーゲルの説く「理解することの不可能性」を読み返すと、19世紀初めにおけるロマン主義的思潮の過度の負荷と、シュレーゲルにおける哲学的認識論の詰め「甘さ」を感じてしまうのは致し方ないのかも知れません。

その上で、私がシュレーゲルに注目するのは、いわゆる「新旧論争」と称される歴史と思想が切り結ぶ認識論に関わる点です。彼は「古代に書かれたものは、近代の読者に最早直接に接近はできない」——これは理解できないと言い換えても良いと思います——。なぜなら読者は近代に属し、書かれたものは古代に属しているからです。同時代のギボン、ヴィンケルマン、ヘルダーらは作品の歴史性を強調し、ほぼシュレーゲルの立場に立っていました。この論点は解釈学の展開の上でなかなか面白い点だと思います。と言うのも、この時間の隔たり、時代の隔たりこそが、ガダマーにとっては解釈学的アプローチにとって絶好の足場を与えてくれるからです。この点については、また後ほど取り上げます。

フリードリヒ・アストはシュレーゲルより6歳年少で、1778年ゴータに生まれました。イエナ大学で最初に神学を学びましたが、やがて古典文献学と哲学に専攻を変え、主に古代ギリシアの哲学者プラトンの研究に励みました。なかでもプラトンの全著作を9巻のラテン語に訳した業績が特筆されます。

古典文献学者としてのアストにとって、古代の思想を真に理解することは可能であるかという「新旧論争」は、切実な問題でありました。引用します。「異邦人によって編纂され、異邦の形式で作られた、すなわち異邦の言語で書かれた作品のどのような解釈も、どのような説明も、個人による理解のみを前提にするだけでなく、この異邦の世界に在る者すべてに理解されるのを前提にしている。そして翻って人間精神の原初的な同一性を前提にしている」。解釈作業というのは、この本来同一である人間精神に到達するために、「時間的なもの、偶発的なもの、主観的なもの」を純化してゆくことなのである。シュレーゲルの「理解の不可能性」に対して、アストの場合はむしろ「理解は必然である」という立場と言い得るでしょう。この種の楽観論とも言える形而上学的立場の前提になっているのは、人間精神の歴史的軌跡に対する独特の見方でありました。彼によれば、精神は歴史のアプリオリな前提であり、初めオリентでは抽象的な普遍は分割不能な単位であったのが、ギリシア世界において個別性と調和する形で分節する。その個別性は人間性の理想的な完成形態を示していたが、キリスト教世界において、その調和性が失われてしまう。アストにとって近代世界は、失われた個別性と理想的な人間性とは、再び結合すべき時代でありました。それゆえ古代精神の理解は、本来個別性

と人間性が一体であった理想状態への理解行為による到達であって、人間精神にすでにビルトインされている、内在的な原理の回復であり、その意味で「理解は必然の領域」であったのです。

アストはその『文法学・解釈学・批判学原論』（1808）のなかで、具体的な文献学研究を通じて、理解に到達するための手続を示しています。彼によれば、まず細部の理解のために、より大きな文脈の存在を想定しながら、断片から、文字から全て遡行的な解釈行為を連続させます。文、章、作品、コーパス、著者、学派、都市、時代、古代世界全体、そして精神へと。これが解釈学的理解であり、それは文脈を出発点として、文字を超越し、意味を見いだす過程です。他方で、彼は古代精神を「精神」一般から演繹し、さらに著者、作品と下降してゆくプロセスも併せて提示します。前者の分析的な手続、後者の総合的な過程、この二つの過程は、相互に一方が他方を前提にしている、一方がなければ他方は存立し得ない相互性で結ばれているのです。これが有名な「循環」の本質です。この方法的構築は、アストの解釈学的主題の中で唯一、後に継承される方法論的着想でありました。

フリードリヒ・ダニエル・エルンスト・シュライエルマハーは、アストより10年、シュレーゲルより4年早い1768年に、シュレジエンのプレスラウに生まれています。彼は哲学者というよりプロテスタント神学の大家（現代プロテスタント神学の父）として知られていて、そこから容易に推測されるように、聖書解釈学を研究活動の主軸においた学者ですから、初めから解釈学の本道を歩んだ人と言えなくもありません。彼はシュレーゲルの「理解の不可能性」という極度にロマン主義的想念とも、アストの「理解の必然性」という楽観主義的な見方とも異なる考え方に立っていました。その定式化は原理的というより、むしろ聖書解釈学者らしい、技術的な側面が濃厚なものでした。それは「誤解が通則なのであって、例外ではない」というものでした。「最もありふれたところに、誤謬がある」というのです。彼は解釈行為の一般的基準として、二つの実践基準を挙げます。一つは、「理解はそれを攪乱する要因（矛盾、ノンセンス）などがない限り、自明であるということ」。もう一つは理解とは徹頭徹尾一つの活動であり、その点で理解は意味構築であるということです。もっと詳しく言えば、語られた、あるいは書かれた言説の最初の文法的構築が目指した意味秩序を再構築することが、理解の目標であり、この第2の基準による作業のみが正確な解釈学的理解を齎すというふうに考えるのです。

シュライエルマハーの解釈学の原理は以下のように纏められます。通例解釈すべき対象は、文法的な解釈の領域と技術的な、言い換えれば心理学的な解釈の領域に分割されるが、その様式は臨界的であり、言説の理解は両者の境界地帯に位置づけられます。解釈者の注意は、交互に二つの領域に向けられるのです。一つは文法分析が提供する、その意味で客観的で、普遍的な側面であり、他方は言語により創造する個々の語り手によ

る言語操作の個別性です。こうして解釈者は自らが研究する言説生産のために使われてきた諸規則を言語の中で遡行することで構築し、また表現に用いられている言語の個別使用を通じて、当該言説の意味を思想の中で再構成し、その意味を構築するのです。この二重の操作により、彼の表現によるならば「理解が一步一步非理解を凌駕してゆく。この操作方針による理解は、無限の営為である」、ということになります。

ドイツ・ロマン主義の解釈学の潮流の極めて大まかな見取り図はここまでで、続いて、19世紀後半の解釈学者、中でもディルタイや古典文献学者としてのニーチェ、あるいはマックス・ヴェバーなども取り上げる必要もありますが、準備が十分ではありませんので、また機会をあらためなければなりません。またハイデガー、ガダマー、リクールらの現象学的解釈学の祖とも言べきエトムント・フッサールは、解釈学者ジャン・グロンダンによれば解釈学に強いアレルギーを持っていたとされますが、それに関わらず、解釈実践について興味深い指摘も行なっています。これも割愛しまして、ハンス・ゲオルグ・ガダマーの解釈学に移ることにします。

## ガダマーの解釈学

ハンス・ゲオルグ・ガダマーは1900年、つまり19世紀の最後の年にドイツのマルブルクに生まれ、2002年3月13日にハイデルベルクで没しました。足掛け3世紀に及ぶ生涯ですが、この長命ぶりは彼の学問スタイルと多分どこかで繋がっているでしょう。

彼の学問的生涯はそれ自体大変興味深いものがありますが、それには今日は触れません。現代の解釈学における一種バイブルとも言べき『真理と方法』が公刊されたのが1960年であり、今年はそのから50年という節目に当たっておりますから、これを記念する様々な学問的催しが世界各地で企画されているようです。

さて、今申したように、解釈学の古典とも称すべき『真理と方法』は、ガダマー特有の悠揚迫らざる緩やかな思考のうねりが導く、なまやかな才気が色褪せて見える大人の書ですが、以下の3点が彼の解釈学の主要な論点として指摘されます。(1)理解の条件としての「先入見」、(2)解釈学的循環、(3)時間的懸隔の解釈学的価値。以下順次簡単に説明を加え、テキスト解釈学への理路を開く導きの糸としたいと思います。

\*

I. 理解の条件としての「先入見」については、よく指摘されるようにハイデガーがその『存在と時間』(1927)の中で展開した「理解の先行構造」という独特な概念が、全く同じ意味ではありませんが、着想の源泉になっています。「理解の先行構造」の基礎は、第一に、解釈すべきものをその視野に取り入れるという先持 (Vorhabe)、第二に解釈されるべきものに視線を向けるという先視 (Vorsicht)、第三に、主題として際立たされた

ものを、予め概念的に規定する先取 (Vorgriff)、これら三つの契機によって構成されています。ハイデガーは解釈者が意識していない、この理解の先行構造を全体として解釈学的状況と呼びました。ガダマーはこの解釈者によって自覚されていない認識基盤を、ニーチェやフッサールの言葉を用いて「地平」と名付けます。

啓蒙期の哲学で「偏見」と同一視され、貶められた「先入見」の哲学的な意義をガダマーは、先入見こそ理解の条件であると逆に捉え返します。先入見を持たないというのは、そもそも理解の行為を作動させないことである、というわけです。先入見は視界として、およそ見ることを可能にする地平であり、同時に見ることの様々な可能性を限界づけてもいる。解釈主体であるわれわれは常に、一定の地平に投げ出されており、その地平において全てのものを理解しているのです。

またこの「地平」には、解釈者が生まれ育った文化の歴史的蓄積である「伝統」も含まれます。解釈者が生活の上で経験してきたことすべてには、生まれる以前からの過去の文化事象が関わっており、それは「地平」の形成の一要素なのです。人が解釈主体として何かを理解しようとするときには、空間的だけではなく、時間的にも特定の「地平」に拘束されていることとなります。それならば自分と違う時代に書かれたテキストを理解できるのはなぜかという、重大な問いが提起されます。これはシュレーゲルの世代が闘わせた「新旧論争」の核心でもありました。人は伝統の支配のもとで、テキストの全体像を予め大掴みにする能力を具えていて、これが「完全性の先取 *Vorgriff der Vollkommenheit*」とガダマーが名付けている重要な概念です。

ガダマーはまたテキストには「真理要求 *Wahrheitsanspruch*」が存在することを前提にします。これは人がテキストを解釈しようとするとき、それがいつの時代のものであっても、それが真であると思い、それに一定の権威性を認めるからこそ、それを学び、それを理解するために読むのである、とする考えです。伝統に導かれてテキストの全体性を予想しながら、テキストから解釈される内容が真であるとしてそれを受け入れるとき、理解が成立するのです。このとき解釈者の地平は、テキストの著者の地平と融合します。これがガダマーの言う「地平の融合」です。

\*

II. 解釈学的循環という概念装置は、すでに先に見たようにアストやシュライエルマハーなどのロマン主義の解釈学の論者たちもまた、形は様々ですが共通して主張してきた論点でした。

ガダマーは『真理と方法』の第2部第2章の冒頭を、「*Der hermeneutische Zirkel und das Probleme der Vorurteile* 解釈学的循環と先入見の問題」と題して論じていますが、見られるようにここでは解釈学的循環の問題と、先入見の問題とがセットで論じられています。しかし1990年の第6版では、その第2巻で補論の形で「*Vom Zirkel der Verstehens*

理解の循環について」と銘打って独立で論じられています。しかし、これはこの同じ章のC節「時代の隔たりの解釈学的意義」で述べられているところとほぼ同じ文章です。その冒頭の部分を少し長くなりますが引用しましょう。「全体を個別部分から、個別部分は全体から理解しなければならないという解釈学の規則は、古代の修辞学に発して、修辞学に関する近代解釈学から理解の学に転用された。それは至るところに見いだされる一つの循環的関係である。そこで思考される全体の意味の先取りは、これによって明示的理解となり、全体によって規定される個別部分が、今度はこの全体を規定する。われわれはこのことを外国語の学習として知っている。そこでは文の個別要素の意味を理解しようとする前に、まずもって文を「構成」しなければならないことを学ぶ。このような構成の過程は、だが先行する文との関連から生ずる意味期待によって、それ自体統御される。この意味期待はテキストが求めるとき訂正されなければならない。だからこのことは、期待は変更を加えられ、テキストは別の意味期待のもとで、その見方と整合させられることを意味している。だから理解の作動は、絶えず全体から部分へ、そしてまた全体へと戻る運動なのである。その課題は、理解された意味の統一性を同心円状に拡張することなのである。全ての個別要素の全体との一致が、理解のたびごとの基準である。こうした一致の欠如が、理解の失敗を意味する」。ここで言われている「意味期待」とは何でしょうか。私の考えでは、先に述べた「真理要求 *Wahrheitsanspruch*」です。言い換えれば「意味の統一性」ということです。あらゆるテキストにはこの「意味の統一性」が内在しているという前提が、解釈学的営為を有効たらしめる条件であると言えます。

\*

III. 第三番目の要点は、「新旧論争」で焦点となった「時間の隔たり」の問題です。すでに指摘しましたが、遠い時代に成立したテキストを時間の深淵を越えて理解することが可能な条件として、ガダマーは「完全性の先取」と、どの時代に成立したテキストであれ、それがテキストである限り内在させている「真理要求」、換言すると「意味の統一性」を挙げていました。「時間の隔たり」とは、テキストの歴史性という認識と結びついています。どの時代の書き手もその時々の「地平」に拘束されながら、テキストを介しての意味表出を行ってきたわけですから、一つのテキストが長い解釈の伝統を具えているとすれば、その時々の「地平」に拘束された解釈学的な成果も残されているわけです。解釈主体は、この解釈史を遡行し、各々の段階の「地平」を見極めることにより、より正確な解釈と理解を実現できるのです。その意味では「時間の隔たり」は、解釈学的実践を阻害する要因であるどころか、助ける要素であると言えます。むしろ時間の隔たりが介在しないほうが、解釈学的営みにとって不利であることを、芸術作品の理解を例にとって次のように述べています。「時間の隔たりが信用できる物差しを示してくれないところでは、われわれの判断が、いつも無力に陥ってしまうことは誰もが経験して

いる。だから現代芸術への判断は、学問意識にとって恐ろしいまでに不確実である。明らかにこれは統御不能の先入見であり、われわれはそのもとで、かかる創造行為に着手し、その真の内容と真の意味に一致しない過剰な共感を寄せることがあり得るのだ。

このように時間の隔たりの積極的な解釈学的効用をガダマーは強調し、18世紀前半の解釈学者クラデニウスの言葉を引き合いに出しています。すなわち「著者が自分のテキストの真の意味を自分自身で認識している必要はなく、解釈者は著者よりもしばしば多くを理解できるし、また、理解しなければならない」。ここからガダマーは、時間の隔たりが「より良い解釈」を引き出すと初版では述べたようですが、1965年に出した第2版——現在の最新版である第9章まで維持されている——では、「より良い解釈」が消えてしまい、というより否定されています。1962年にハイデガーが『芸術作品の根源』という著書の中で、「より良い理解」という契機を放棄し、もっぱら歴史に無限に開かれた態度を示す、「別様」に理解することを探究する方向で力説したことと関係していると思われます。ガダマーはこの節の箇所の終わりで「Es genügt zu sagen, daß man anders versteht, wenn man überhaupt versteht」そもそも理解するときには、別の仕方でも理解していると言えれば十分であると述べています。解釈学的実践の中で、「地平の融合」をなし得たとき生まれるのは、別様な理解であるに違いないのです。なお付け加えると、ハイデガーは解釈学的循環は、永遠の運動であり、終わりはないという点で、ガダマーとは一線を画しています。

## 歴史テキストの解釈学へ

ここまで述べてきたような、哲学的解釈学により論じられ、深められてきた成果を、テキスト解釈学の実践にどのように活かすかについては、時間も迫ってきましたので、他の機会にゆずることにして、ここではごく簡単なアウトラインを提示したいと思います。

解釈学的循環は、実証的な操作で史料を研究する者にとって、言わば馴染みの現象です。通例歴史家がある歴史書を史料として読むとき最も心がけるのは、そこにいかなる事実が書き記されているかを、確認することです。これがある思想を表明するような書物であれば、対象にする思想を再構成することを第一の課題として読むことになるでしょう。しかし、例えば6世紀後半のトゥール司教グレゴリウスの『歴史十書』のような作品であれば、何が書かれているかの個別的事実を確定する作業が最初に行なわなければならない仕事です。この書物は総語数11万9904語からなり、タイトルが示すように全体が10書からなり、1書が平均45章ほど、正確には443章から構成されています。とりえず、最初の序文から読み進み、語られている事実をカードあるいはノートに取りながら読んで行きます。そして第1書の最後の章である第48章を読み終えた段階で、



この第1書全体が何を言わんとしているかを、つまり意味を考えるでしょう。書かれていることの「意味」を考察する作業は、読んで行く間に常に行なわれている筈ですが、単位が小さすぎると、なかなかクッキリと意味が際立って来ません。実は「意味」が本当に立ち上がるためには、書かれている事実の背景情報が必要です。21世紀の最初の10年が対象であるならば、われわれが日々生きている現実ですから、背景についての説明は一つ一つ必要ありませんが、西洋のしかも今から千四、五百年も前となれば事情が全く違います。一つ一つの事柄が、どのような制度的、社会的、経済的、文化的、精神的背景のもとに生起しているかを理解しなければなりません。そうした事柄を研究として再構成した書物はありますが、いずれも十分に信頼して枠組とし使える域には達していませんし、遺漏が多いものです。グレゴリウスが語る舞台の多くが宮廷ですが、その宮廷は、今のところ只の一つも遺構が発見されていません。

従って『歴史十書』の読み手は、「事実」を確定しながら、同時にこの物語の展開に寄り添いながら、この時期の制度的、社会的、経済的、文化的、精神的コンテクストを再構成しながら読解する作業が求められます。しかし読むという作業は、常にそうした性格を持っています。これまでの当該テーマについての研究文献は、読み手自身が実践しなければならない読解作業の助けにはなってくれますが、決してその代わりになり得ないのです。なぜなら読解、あるいは理解する作業、「意味」を探し求める作業は、ガダマー流に言えばテキストに即した真理を理解することであり、それはハイデガー流に言えば過去という事象に投げ出された解釈主体が、全ての力を傾けて履行しなければならない、実存的企て、「被投的企投」ということになります。

事実を再構成しながら、それを元にそうした事実を嵌め込むための諸々のコンテクストを同時に作り出す作業を絶えず実践しながら、最後の1語まで辿りつく訳ですが、そのプロセスは他ならぬ部分的「真理」と、読みが進行するなかで臍げに浮かび上がり、形を為しつつある作品の「真理」とが解釈学的に循環する過程に他なりません。これ以上細かい説明をする余裕はありませんが、『歴史十書』というこの作品の固有の「意味」は、世界の終末の時である「世界年」の到来を確信し、その相貌のもとに自らが生きる時代の全ての出来事を見ていた一人の教会人の存在を示すところにあったのだ、というのが私の結論です。

もう一点は、「時間の隔たり」の解釈学的効用についてです。歴史テキストの研究では、解釈主体とテキストとの間の時の隔たりは、自明の前提です。時間軸を遡った時代を対象にしていればそれだけ、時間の蓄積の過程で実践された解釈の層もそれだけ厚くなるのは道理と申せましょう。

中世のしかも初期の中世を研究対象にしている者にとって、どのような対象を研究の課題に選んだとしても、まず為すべきは研究史、学説史の丹念なフォローですが、それは同時に特定のテキストの「意味」解釈の歴史を辿る作業です。その蓄積が多ければ多

いほど、作業自体は大変ですが、逆に解釈主体が当該テキストの「意味」地平を正確に確定する可能性が高くなるのです。解釈営為の蓄積が、客観的基準に則って実践されて来たならば、それらはテキストに即した「真理要求あるいは、真理主張 *Wahrheitsanspruch*」を志向する議論の蓄積であったはずであり、解釈上の法外な逸脱の誤謬は自ずと排除されるからです。

また、それぞれの時代の解釈実践の成果は、その時代その時代の解釈の地平とコンテキストのありようも逆に照らし出し、解釈主体が当該テキストの書き手の「地平」を理解する、その「意味」を理解するための重要な契機となるからです。先に引き合いに出した『歴史十書』に関連して言えば、私が著書『歴史書を読む―「歴史十書」のテキスト科学―』によって、世界の創造から六千年で世界は終わりを迎えるという「世界年」の問題が、グレゴリウスの隠された動機であり、彼が自分の著書に与えた「意味」であると主張しました。古代後期からポスト・ローマ期にかけて、教会人の心を絶えず捉えていたのは、世界の終焉を迎えることへの配慮と、それが暦の上で何時なのかということでした。キリスト教会を指導する彼らは、世界の終わりについて軽々しく語ることはできません。それは徒に人心の不安を煽ることになるからです。それだけに彼らの不安は内攻し、時として秘めたる言説として洩れ聞こえて来るのです。グレゴリウスの「地平」は、私に言わせれば、その約二百年後に到来する筈と彼が考えた「世界の終焉」によって満たされていたのです。

学説史、研究史の検討は、ガダマー流に言えば「作用史」の検討ということになるでしょうか。これは歴史テキストの研究にとって、根本的に重要であり、決して疎かにしてはならないことを指摘して、今日の話の締め括りとします。

ご清聴有り難うございました。

## 参考文献

- Hans-Georg Gadamar, *Wahrheit und Methode*, Bd. 1, *Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, Bd. 2, *Ergänzungen und Register*, J.C.B.Mohr, Tübingen, 1993.
- Jean-Michel Salanskis, François Rastier et Ruth Scheps (éd.), *Herméneutique: Textes, Sciences*, PUF, Paris, 1997.
- Jean Grondin, *Le tournant herméneutique de la phénoménologie*, PUF, Paris, 2003.
- Peter Szondi, *Introduction à l'herméneutique littéraire. De Chaldenius à Schleiermacher*, CERF, Paris, 1989.
- Denis Thouard (éd.), *Textes de F. Schlegel, F. Schleiermacher, F. Ast, A. W. Schlegel, A. F. Bernhardt, W. Dilthey. Critique et herméneutique dans le premier romantisme allemand*, Presses Universitaires du Septentrion, Lille, 1996.
- H.-G. Gadamar, *L'herméneutique en retrospective, traduction, présentation et notes de Jean Grondin*, Vrin, Paris, 2005.
- Paul Dubouchet, *Le modèle juridique. Droit et herméneutique*, Harmattan, Paris, 2001.
- ハンス＝ゲオルク・ガダマー著 饗田収他訳『真理と方法 I』法政大学出版局, 1986年.

ハンス＝ゲオルク・ガダマー著 轡田取／巻田悦郎訳『真理と方法Ⅱ』法政大学出版局，2008年。  
 シュライエルマッハー著 久野昭／天野雅郎訳『解釈学の構想』以文社，1984年。  
 デイルタイ著 久野昭訳『解釈学の成立』以文社，1973年。  
 丸山高司『ガダマー—地平の融合—』講談社，1997年。  
 佐藤彰一『歴史書を読む—「歴史十書」のテキスト科学—』山川出版社，2004年。

[付記] 本稿は2010年4月21日に名古屋国際センタービルで開かれた、第26回オープン・レクチャーとしておこなった講演の草稿を、そのまま採録したものである。